

**目的** 夏期における不快な暑熱環境は湿度を低下させ、気流速度を増加することにより緩和され、温熱的快適さを得ることができると考えられる。既報<sup>1)</sup>では設定された暑熱環境下に被験者を暴露して実験を行ったが、本報では、温度および湿度の異なる条件下において被験者自身がもっとも好ましく感じるように気流速度を調節してもらい、その時の人体影響を測定した。

**方法** 実験は奈良女子大学人工気候室に、気流速度の調整可能な送風装置を被験者の前面0.8mの位置に設置して行った。気温は26℃、28℃、30℃、32℃、相対湿度30%、50%、80%で一定とし、気流速度は0.2～1.5m/sの範囲で随時自由に選択してもらった。被験者は健康な青年女子12名を採用し、夏服着用(0.35clo相当)椅座安静状態で入室60分後より60分間気流に暴露した。生理的反應として皮膚温14点を8秒間隔で測定し、心理的反應として温冷感、快適感等の申告を10分間隔で受けた。実験は1983～1985年の6、7月に実施した。

**結果** ①被験者の選択した好まれる気流速度は、気温26℃—ほぼ0.6m/s、28℃—0.6～1.0m/s、30℃—1.0～1.4m/sで、気温が高い程速い気流速度を選択した。また、気温28℃では、RH30%—0.6m/s、50%—0.9m/s、80%—1.0m/sと湿度が高い程速い気流速度を選択した。②好まれる気流速度を選択した場合、平均皮膚温は、0.4～0.7℃低下し、32.5～34℃の範囲にあり、温冷感は「-1: やや涼しい」～「0: どちらでもない」、快適感は「+1: やや快適」～「+2: 快適」であった。③気温32℃—RH30%では気流によって快適とならず、30℃—RH80%が気流によって快適となる上限だと考えられる。

文献 1) 田中他: 夏期における湿度と気流の影響について, 家政学会関西支部第59回講演要旨集 1983.5

2) 田中他: 夏期における変動気流の影響について, 家政学会大36回年次大会講演要旨集 1984.9